

PHD LETTER

89

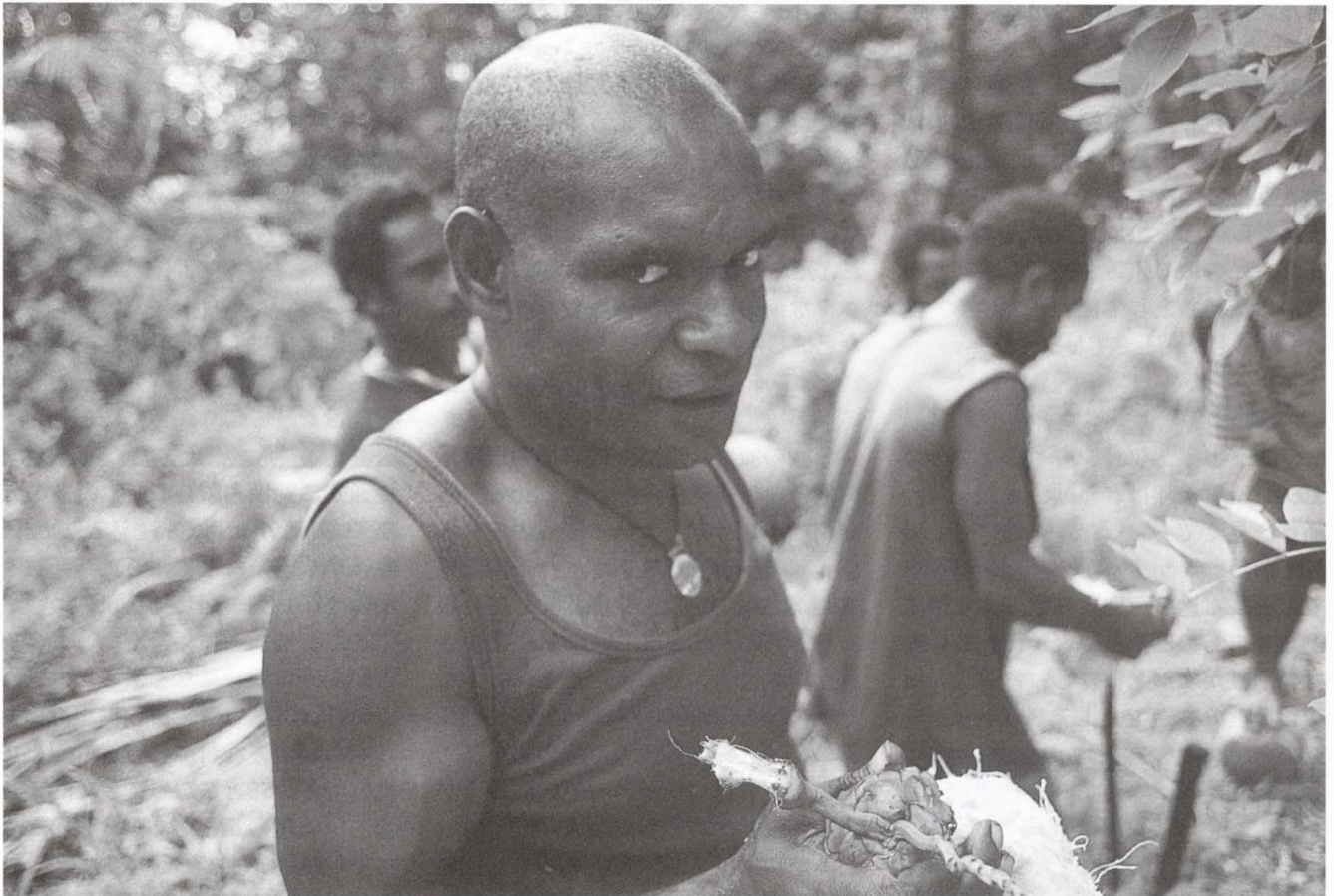
PEACE, HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

2003.12

- 私たちが変わるための試み③
「とにかくやってみよう」 . . . P.3
- 研修レポート . . . P.4-5
- 第6回パプア・ニューギニア
スタディツアーレポート . . . P.6-7

PHD運動とは1962年より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事した岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり (Peace) 健康づくり (Health) を担う人材をつくる (Human Development) 運動を世界中にひろめることを目的として、1981年からはじまりました。

発行：財団法人PHD協会 理事長 今井 鎮雄
編集人：藤野 達也
住所：〒650-0022 神戸市中央区元町通5-4-3
元町アーバンライフ202
TEL 078-351-4892 FAX 078-351-4867
E-mail: phd@mb1.kisweb.ne.jp
URL: <http://www.kisweb.ne.jp/phd>
定 価：100円



パプア・ニューギニア、モロベ州フィンシャーフェン 撮影 FUJINO T.

お金になると聞くバナラを植える。
仕事の区切りにひと休み。
畑の周りの椰子の木から実を落とし、
のどをうるおす。
自動販売機からではなく、これがここのやり方。
「あんたも、ひと口、どう。」

東西南北 問題解決 取組日記

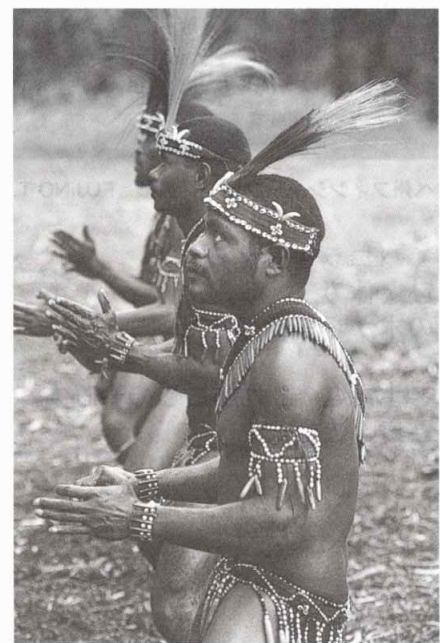
8月×日

引き継がれる思い

雨のワリンガイ村で3月に亡くなったレル・サバさん(90年度)の墓参り。白いサンゴが敷き詰められたお墓に線香をあげた。帰国後、多くの人々が通る道沿いに農場を招いた。これまでやってきた焼畑と異なる一ヶ所の土地に幾種類もの作物を順繰りに作っていく方法を実践し、周囲にも広めようとしてきた。病気で、志は道なかばとなってしまったが、これからは彼の一族、兄弟、親戚が引き継いでいくんだと墓前で聞かせてもらった。直接の研修生はいなくなっても、研修生の思いがその地域の人々に伝わっている。これがPHDの支援のしかたの強いところだと思った。レルさんの取り組みが技術もさることながら気持ちとして伝わっている。柄にもなくじーんときてしまった。

これはいいぞ、ニューシンシン

ワンドカイ、ワリンガイの2つの村でシンシンと呼ばれる歌、太鼓を伴う踊りを見せてもらった。以前にも他の村でお目にかかったが、今回は今までのと少し違う。客人を歓迎する儀式としてのものばかりでなく、新しい題材の踊りが次々と披露される。これはここ最近の動きでカルチャーグループ



という名の若者中心の組織によって演じられている。2つの村はシアルムという地区にあるが、この地区内の別の村で起こった動きをまねて作られた。村の生活が外部との接触が増えることにより変化してきた。村に居ても新しい物や欲しい物が増えてきている。それはいいことばかりでなく、物そのものやそれを手に入れようとするることによる弊害も目につくようになってきた。新しいものや外にあこがれるばかりではなく、「伝統的な生活をもう一度見直していこう。」という考えの中から生まれてきたものだという。

伝統的な生活の良さ、大切さを織りこんだ踊り歌を自作する、ワンドカイのグループは結成からまもなく2年。これまでに60のレパトリーを持つ。20~30代を中心に35人、最近は踊りの班だけでなく、劇による班もでき、エイズをはじめとする保健のことを伝えることも始まっているようだ。伝統的な踊りのグループに新しい機能をもりこんだこの動きは自発的なものであり、ヘタな海外からの支援よりずっといいなと感じた。

JICAとの接点

今回の旅は、JICA(国際協力機構)関係者との接触が多かった。86号でもふれたが13年前、大阪、寝屋川で淡水魚養殖の指導をして下さった矢田敏晃さんが、JICAのシニア隊員として今年4月からパプアニューギニアに赴任された。教え子のその後を見たいとのことで、今回、職場の関係者を誘って合流。シニア3人、夫人1人、協力隊員2人にレイでお目にかかる。その内5人が研修生の村まで行き、交わった。

外務省、JICAがNGOへの支援を活発に行うようになって10年余り。海外でお金を使うプロジェクトを原則として持たない当会は、この支援策を受けることはこれまでなかった。しかし資金を介在させなくても政府系とNGOが協力しあえるところが多くあるように思う。今回も研修生、村人はいくつもの助言をもらうことができたし、NGOとしては草の根からの取り組みを人の動きとしてお見せできたと思う。(帰国後、参加者からの報告が届いた。今回別項でその一部をご紹介します。)

村を出て首都ポートモレスビーでは、JICA事務所の手配で、遠隔地教育の教

材づくりの現場を見せていただき、斉藤所長、担当の方々と意見交換も行った。その中で任国への資金援助を水やりにととえて、砂地にしみ入って、見えなくなってしまうことはこの業界でよく言われるが、ここではその水が地面につく手前で蒸発してしまうと言われた話が印象に残った。近代化の道をほんの数十年でたどろうとしているこの国では、お金が入るインパクトの強さは想像以上なのだろう。だからこそ、支援が目に見える経済だけに片寄ことは問題だと思う。

8月×日

商売的成功がもたらしたもの

パプア・ニューギニアの後、お盆をはさんでインドネシアへ。2人の男性、2人の女性を招いた漁村パシルバルーで2泊。ここに通い始めて17年になる。西スマトラ州の州都パダンから70km、車で2時間程で田舎とはいえ遠くない。ただし浜はすべて砂で、これまで港を作ることができなかったのが、人力で浜に引き上げることのできる大きさの船にとどまり、急激な発展をとげることはなっていない。当初は電気もきておらず、魚を運ぶための氷もなく、流通する範囲も限られていた。しかしまずは外部からの氷の持ち込みに始まり、車の普及などにより、遠くにも魚が運べるようになり、流通形態が変わってきた。要するに獲ったもののほとんどが商売の対象になるようになった。これは漁師にとってはいい事なのかもしれないが、漁村に住む漁師以外の人には厳しいことになってきている。かつては鮮度のことがあり、獲ってもすべてが仲介に売れるものではなかった。そこでは浜で村の人むけの商売があり、多目に獲れた時にはタダでもらえることも良くあったそうだ。ところが今はすべてが仲介人に浜で買いつけられるようになり、村人が漁師から直接買うことができなくなってしまったという。浜に住んでいながら、安く魚が食べられなくなってきた。漁師の収入という観点から見れば、発展ということなのだろうが、この村に住む側から見ればキツくなっている。今この村の河口に港を作ろうという計画がある。果たしてこれが村人の多くにとってプラスになるのだろうか。 総主事代行 藤野達也

私たちが変わるための試み ③

「とにかくやってみよう」

齋藤 明裕 さん

■□ 旅からPHDへ □■

「それじゃ、僕の下宿に泊まっていったら」、一緒に安ホテルを探してくれたが、イスラム教のお祭りですべて満員、結局彼の下宿に泊めてもらうことになった。こんな親切はしょっちゅうだった。若い頃からバックパックを背負いアジア、アフリカを旅してきた。ことばも十分でない私がトラブルもなく旅ができたのは、出会った人たちの親切によりかかっていたからだった。泥棒さんと一緒に旅した時も(もちろん泥棒とわかったのは後になってからであったが)、親切にも彼は私の荷物ではなく他の人の荷物を盗んで逃げ去ってしまった。その旅の経験をもとに、子どもたちに私の好きなアジアやアフリカを知ってもらおうと授業などで取り組んできた。

自分の経験と本やテレビからの情報によるアジア・アフリカの授業が完全にマンネリ化してしまっていたころ、「開発教育」に出会った。そして中学教員の学校外での研修制度が始まった年、学校という社会を外から覗いてみようと思いに応募した。研修先は自分で決めることができるが、どうせなら自分の関心があるところをと思い、アジアやアフリカに少しでも関係のあるところを探した。当時、私の知っていたそのような機関は、JICAと「開発教育」を通じて知ったPHD協会だけであった。JICAには「そんな制度はありません」と断られたが、PHDはNon Government(非政府)だけあって柔軟に対処してくれた。3年前のことであった。

■□ 有機栽培をはじめ □■

2ヵ月間の研修のあと職場に戻ったが、なぜかPHDとの糸が切れずにつながっている。たぶん「このわけのわからんおっさんが」と思いながらもお世話いただいた芳田さん、古本さんの魅力(魔力?)に引きつけられたのだろう。そのつながりの中で有機農業を経験してみようという話がでてきた。そしてとにかくやってみようということになった。そのことについては前号でおしたさんが書いていたが、私は学校に畑(花壇?)があるので生まれて初めて農作物の栽培を始めた。

私の実家は兼業農家であったが、最初から自分で野菜を栽培するのは初めてで、「失敗してもともと」という気持ちで6種類の野菜を植えてみた。元肥も施さず畑に直接トマトの種をまいた。いつまでたっても芽が顔を出さない。「これじゃまずい」と思い、苗を買ってきて畑に植えた。同時にもう一度、今度はプランターに種を蒔いた。苗から育てたトマトは、7月下旬から8月中旬にかけてたくさんの実をつけてくれた。熟したトマトをそのまま食べると、子どもの頃畑で食べたトマトの味がした。種から育てたトマトの収穫時期は、苗植えより半月ほど遅れた。それが問題だった。苗植えの2倍はあ

る実をつけた種まきトマトは赤みをおびはじめ少し前から実にヒビが入り始め、赤くなるに従ってヒビが広がっていった。原因は雨らしい。今年の夏は天候不順で雨が多かった。特に種まきトマトが実をつけてからは、雨が多かった。トマトが水分を吸収しすぎて破裂してしまっただけでなく、ひび割れたトマトのほとんどは生ゴミ肥料の原料になってしまった。種まきトマトとメロンは、ひび割れをおこしたが他はうまくいった。ししとうなどはこれでもかこれでもかと実をつけ、最後は実が赤くなるまでほうっておいた。

今年から障害児学級を担任することになり、彼らが興味をもって学べることは何かなあと考え思いついたのが、PHDのボランティアでやろうということになった野菜の栽培、それも実をつける野菜の栽培だった。もっとも、収穫やそれを材料にした調理にはこどもたちも興味をもって取り組んだが、草抜きなどでは作業中いつの間にかいなくなり、他のことをして遊んでいる始末だったが…。しかし、彼らが「いつできるの?」と収穫を楽しみにし、また「今度はおさつドーナツをつくろうよ」と収穫物を食材にした調理実習をねだる姿を見ると、来年も野菜の栽培を続けてみようかと考えている。

■□ これが国際協力? □■

NGOは海外で活動しているため、支援者はその活動を実感としてとらえにくい。そのため頭だけでものを考え、井戸を掘ることですえ現地の人々をより苦しめる

ことになることもあるということを理解できにくい。ある日本の代表的なNGOでも、現地駐在員と日本国内のスタッフの間で大きな意見の対立があったと自らの活動を回顧していたが、これはNGOの宿命かもしれない。ただ、モノや金ではない協力、人づくりによる協力をかかっているPHDは、他のNGOと少し異なる面をもっているのではないだろうか。人づくりのための研修を日本で行い、アジアや南太平洋から招いた若者と日常的な交流をもつことができることも特徴の一つであるが、彼らが自分の村に帰り行う活動の一端を我々も日本で経験できるということが大きな違いのように思う。数年前の会報に、スタディツアーに同行した研修生受け入れ先の農家のおとうさんが、根腐れをおこしている作物を見て、その場で指導したという記事がでていた。研修生が日本で学んだことを村に帰って行う上で、いろいろな困難に直面するだろうが、私たちが失敗しながらも行っている、直接自らの生計にはかわらないままごとのような有機栽培でも、それを経験することによって研修生と共有できる何かを得ることができるのではないだろうか。そして、たとえままごとのような活動でも地道な国際協力を支えることにつながるのではないかと、などと考えるのは思い上がりに過ぎないだろうか。



21期研修生

研修生レポート

ケンターウェ (通称マウエ) さん (ビルマ、女性、21才)

- 保育・保健衛生・農業研修-
- 1. 瀬加保育所 (兵庫県市川町) 中塚加代子 (滞在/市川町)
- 2. 小田由美子 (滞在/市川町) 小前芳彦・達子 (篠山市)
- 3. 円谷利行・豊子 (篠山市)
- 4. 波賀みどり保育園 (兵庫県波賀町) 小林喜美子 (滞在/波賀町) 井原宏枝 (滞在/波賀町)
- 5. 波賀町社会福祉協議会、(特養)かえて園 (波賀町) 中村一日郎・庸子 (アレンジ・滞在/波賀町)
- 6. はらっぱ保育所 (西宮市) 前田公美 (滞在/西宮市)

<敬称略>

村ではいつも家族と一緒に寝ているため、来日してからしばらくは夜1人で寝ることに慣れずホームシック気味だったマウエさんですが、今ではすっかり日本の生活に馴染み、研修先からの電

話で「ここが気に入ったから、もう神戸に帰りませーん」と冗談(半分本気!?)が言えるほどになっています。

村の小学校で時々ボランティアで子どもたちにビルマ語、英語、算数を教えていることもあり、保育園での研修はとても楽しいようです。「日本の子どもたちはみんなで歌を歌ったり、本を読んだり、栄養のバランスのとれたご飯を食べたり、と保育園で色々なことを学べてとてもいいですね。私の村にもいつかできればと思います」。反面、1才に満たない赤ちゃんが朝から夜まで預けられていることにはかなり驚いたようで、「お父さん、お母さんと一緒にいる時間が少ないのはかわいそう。仕事が忙しいのはわかるけど…」と複雑な心境だったようです。

波賀町でホームヘルパーや老人ホー

ムの仕事を体験させていただいた時にも、きめ細かい配慮やサポートに感謝しつつも、やはり「なぜお年寄りだけが暮らしているのか」という点がなかなか理解し難いようです。これは、私たち日本人こそがしっかりと向き合っていかなければならない疑問なのだろうと考えさせられました。



「マウエさん、こんにちはー」(波賀町)

エルリナ (通称エリ) さん (インドネシア、女性、29才)

- 洋裁・保育・保健衛生研修-
- 7. くらふと・ぎやらりー多田 (兵庫県芦屋市)
- 8. ささやま保育園 (篠山市)
- 9. 山岸輝雄・永子 (滞在/篠山市)
- 10. くらふと・ぎやらりー多田 (芦屋市)
- 11. (株)尾崎食品、とうふ工房「亜蔵」 (神戸市西区)
- 12. 高橋武子 (三木市) 光田弘・和子 (滞在/神戸市西区)
- 13. 篠山市保健福祉部健康課 (篠山市) 田辺美起枝 (滞在/篠山市)

<敬称略>

エリさんからタベ村でも豆腐を食べると聞き、一体どんなものかと8月のスタディツアーの時にリクエストすると、日本の木綿豆腐と全く同じものが出てきました。日常の食事における肉や魚

などの動物性タンパク質不足を補うのに丁度いいものがあるではないか、と思いましたが、事はそう単純ではありません。冷蔵庫がなく保存が利かないため、週一回の市場がある時にしか食べられないのです。

他にも「テンペ」と呼ばれる大豆とキャッサバの粉をテンペ菌で発酵させ、固めて乾燥させたものを食べたりと大豆加工食品はいくつかあるのですが、それが植物性タンパク質で肉や魚の代わりになりえるということは今まで村の人たちに知られていませんでした。

こうしてエリさんは神戸市内の豆腐屋さんで豆腐作りや豆腐、おからを使った料理法などを学びました。「豆腐作りはとてもおもしろかったです。大豆

が体に良いこともよくわかりました。村の婦人会でお母さんたちに教えたいです」。原料の調達にいくつか課題はありますが、過去の農業研修生たちと協力してタベ産の有機栽培大豆を使用した豆腐が食べられる日が来るかもしれません。



豆腐作りの特訓中(神戸市)

◆◆ 第8期国内研修生 ◆◆

坂西 卓郎さん



神戸市在住・24才
小技：つぼマッサージ(現在修行中。この冬には大活躍の予感?)

はじめまして。10月から3月までPHDで研修させて頂くことになりました。大阪YMCA専門学校で学び、貿易商社、フェアトレード団体を経て、ようやくPHDに辿り着きました。というのはPHDのことは6年程前から知っていたのですが、PHDの活動が理解、共感できるよう

になったのは最近で、我ながらいふんと道草を食ったものだと思います。事務所で笑ったり、悩んだり、怒ったりしながら、「共に生きる」というテーマを会員、ボランティアの皆さんとの出会いから学んでいきたいと思っています。人生ぼちぼち、よろしくをお願いします。

アレハンドロ・スミブカイ・バナ (通称アンディ) さん (フィリピン、男性、31才)

- 農業研修-
- 7. ふえろう村塾 (兵庫県小野市)
- 8. 中野宗嗣 (春日町)
- 9. 吉田吉彦 (氷上町)
- 10. 大森昌也 (和田山町)
- 11. 寺田まさふみ (出石町)

<敬称略>

日本語が少し苦手で、おとなしい性格のためなかなか積極的に質問や議論をすることはできないようですが、それぞれに異なるこだわりやスタイルを持った研修先の農家をまわる中で、アンディさんは帰国後の活動に向けて着々と色々なアイデアを整理していています。

例えば、ふえろう村塾で建設中の豚肉加工工場、大森さんのパン作り、寺田さんの納豆作りなどを通じて、農産物を加工して売ると付加価値をつけることができたり、農閑期の収入源を確保できることに強い関心を持ったようです。「まずは、畑でおいしい野菜を作ることから始めたい」と話す堅実な

アンディさんですが、その先いかにして有機農業で食べていくかについても考えをめぐらしています。

彼が日本の有機農業で気になる点の一つとして挙げているのは、「日本では有機農業であっても野菜の種などを自家採種せずに市販の種を買って使っていること」です。フィリピンでは種からこだわっていくべきという意見が多いようですが、やはり日本では効率や経済的な面を考えると限られた作物でしかできないのが現状。理想と現実の差を目の前にしているアンディさんです。



出荷の準備中(氷上町)

共通研修 1. 明石協同歯科 (口腔衛生研修/兵庫県明石市)

研修生は歯がいい!? -その1-

明石協同歯科の黒田先生には、10年以上もの間研修生の歯を診察してもらい、ブラッシング指導や虫歯の原因などについてお話を伺ってきました。今までは一年に一回、それも帰国前に診てもらうことが多かったのですが、今年からは来日して日本語がある程度上手になったらできるだけ早いうちに一度行くという方針になりました。

そのきっかけになったのは、昨年度の研修生ミミさん(インドネシア、女性)の歯の状態でした。前歯以外が虫歯で溶けたり、抜歯されてほとんどないという状況だったのです。それまで、先生やPHDのスタッフには、「研修生には虫歯が少ない」というイメージがありました。歯石がたまっていたり、抜歯による治療で歯が何本もないということはありましたが、ミミさんのような例は初めてで、正直なところ本人も私たちがかなりのショックを受けました。

そして9月に21期生の3人を診察してもらったところ、エリさんもミミさ

んとほとんど同じ状況であることがわかりました。さらに、アンディさんとマウエさんにも少なくない数の虫歯が見つかりました。

研修生の出身地域に共通した原因としては、昔はなかったような甘いお菓子や飲み物が増えてきたこと、歯の大切さや歯磨きのやり方などを知る機会がほとんどないか少ないことが挙げられるでしょう。ただ、インドネシアのタベ村の状況はかなり深刻であり、この問題については8月の出張時の調査報告も踏まえて次号で引き続き取り上げていく予定です。



虫歯のでき方、予防法などについてお話を聞く

帰国研修生短信 <インドネシア>

パダン

ラッドさん

結婚をして、12月出産予定です。お母さんらしい顔つきになっています。今は、大学で週に10時間程日本語を教えています。

パシルバルー

ハスマヤニさん

近くの町のFMラジオ局の番組を月曜日から金曜日まで2時間ほど担当しています。ヤニさんの時間では、日本で勉強した健康の話等を取り上げ、電話相談も受け付けています。また、週3日学校で27人の生徒に日本語を教える仕事もしています。

タベ

ダスウィルさん(99年度)

メンバー23人の農業グループのリーダーで、技術的な話しや、作付会議のようなことなどを時期に応じて話し合っている。米は4種の在来品種を作っていますが、ねずみの害が引き続き大きな問題となっています。さとうきび、唐辛子、とうもろこし、きゅうり、豆類を作っていますが、この1年は唐辛子に虫が多く、農薬を少し使ったとのこと。「他の畑で農薬を使うから虫が逃げてきて、どうしようもなくなった」と話していました。

3年に1度行われている地域の人口調査を郡庁から依頼され、徒歩で村を回っています。また、今は村をあげて水道事業の獲得に乗り出しているようで、郡庁との折衝や、会計的な仕事などでアフダールさん(00年度)を補佐してかなり忙しい様子でした。

最近山の木が減っていることに問題意識を持っていて、郡庁にかけ合い、植林事業を始めたいと話していました。

アフダールさん(00年度)

鶏は150羽いましたが、雨が多く2ヵ月前に病気で死んでしまい、43羽にまで減りました。かなりショックだったようですが、これからまた地道に増やしていきたいとのこと。

村長の仕事で忙しく、「村長はお金は少ないけれど、気持ちで働くもの。PHDの仕事みたい」と言っていました。

(P5より続き)

アルワイさん (01年度)

農業グループでは、月1回ミーティングをし、夜に不定期にメンバーの家などで自然と集まり話し合うことも多いそうです。メンバーは昨年の20人から10人に減りました。天候不順などでうまくできないと簡単に抜けてしましますが、戻ってくることもあります。

最初2羽から始めた養鶏は、今では地鶏が32羽、ヒヨコ10羽。エサは1日に2回で、ごはんの残り、米ぬか、唐辛子、玉ネギ、にんにく、市場で残つ

た悪い魚をタダでもらって使っています。メスが100羽になったら、卵を本格的に売り始めたいそうです。

ミミさん (02年度)

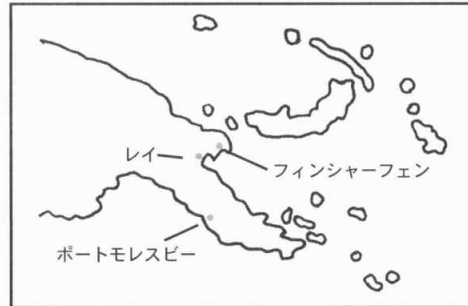
4月からタベ村の診療所の看護師と協力して村長宅前で老人を対象に、血圧、体重、栄養のことなどを話すプログラムを始めました。現在68人のメンバーがいます。また、5月からは、従来の赤ちゃん用のプログラムに加えて、もう一つ別にプログラムを始めました。現在5才以下の乳幼児が72人登録され

ています。村では政府が作った母子手帳のようなものがありますが、診療所に一冊しかありません。JICAのインドネシア語で書かれた母子手帳は、行き渡っていますが、読むことができるお母さんが少なかったり、勉強することにも慣れていないので、難しいそうです。

5月からは、洋服屋さんもスタート。村のお母さんが布を市場で買って、デザインと一緒に考え、仕立てるというシステムで、今まで44着を作りました。今後、婦人会などで教えていけるようになりたいと思っています。

第6回パプア・ニューギニア スタディツアー報告 (8月2日~9日)

今回の旅には研修でお世話になったお二人を中心に、現地でJICA関係者が合流し、フィンチャーフェンの村を訪ねました。



5年ぶりのPNG訪問

平尾栄治さん (神戸市)

ワニさんがレイの空港で私たちを出迎えてくれた。97年度のPHD協会研修生。当時私は、兵庫県立中央農業技術センターで広報・国際交流担当として、彼ともう1人の研修生のハリエオさんが参加した農業技術センターでの短期の土壌分析や農産加工実習に立ち会った。彼らが帰国した98年の夏、私はスタディツアーに参加し、ワニさんとハリエオさんの村を訪問した。あれから丸5年が経過した。98年も今年と同様雨が多く、マキニの空港からワニさんのベディング村まで歩いて3時間と言われたが、荷物を預けても約2倍の時間を要した事が忘れられない。

フィンチャーフェンの港からサトルバグへ向かった。トラックを改造したバスがスリップして思うように進まない。途中、乗客全員でロープを引っ張りながら、ようやく村に到着した。サトルバグの標高は約900mで、夜間はかなり冷え込み、煙たいが囲炉裏の火が欠かせない。村の中を案内してもらい、一息ついた時、麓から歩いて6時間かけてハリエオさんが合流した。サトルバグは3つの村からなり、滞在したマルルオ村の人口は約500人で、農業主体の村である。イモ類、野菜類を自給作物

として栽培し、換金作物としてコーヒー、バインアップル、陸稲、カボチャ、インゲン等を栽培している。特に野菜はF1種子を購入して栽培するが、種が採れず継続して栽培できないので困っている。東南アジア地域の在来種でPNGに適した品種の導入が必要と思われる。

PNGでは近年、米の需要が高まり、年間14万t程度、オーストラリアの企業から輸入している。ピーク時には60万tの輸入があり、国家予算の約40%を占める時期もあったと聞く。国内自給は大きな課題で、JICAの稲作プロジェクトに大きな期待を寄せている。サトルバグでも3つの村すべてで1945年以降米の栽培が始まった。機械化は進んでおらず、棒で穴をあけ播種し、実った穂を手でもぐといった具合である。精米も木の臼でトントンと叩いてつくためロスの割合が非常に高い。したがって日本の精米機は彼らの最も望むものであると聞く。

稲作プロジェクトは始まったばかりである。JICAの人は種籾を選び出す段階から、援助する物と人(技術)のバランスを保つことが必要というが、石器時代から7000年間続いてきた農耕文化を独立後の30年間で一気に変革する事が果たして彼らにとって最良のものであるかどうかの判断は難しい。彼ら自身で変革のプロセスを検証、構築し

なければならぬと思われる。

マルルオ村では昨年、90戸で3tの米の収穫があった。今年は共同耕作の導入で10tに伸びている。陸稲栽培は3~4年の輪作で畑を代えていく。9月から10月に山を切り開き畑の準備をして、11月に播種し乾期の4月に収穫する。5月から8月は雨期の最中で何もしないで毎日ゴロゴロしているという。日本の冬の時期にあたる期間である。日本の農家は副業や農産加工で生計を維持してきたが、PNGでは食べるのに困らないため、日本のようにあくせく働かないようである。

JICAだけでなくパキスタンや台湾、韓国が稲作プロジェクトに参加しPNGの米の自給に取り組んでいる。ハリエオさんの村でも精米機を導入し、増産体制を目指している。ワニさんやハリエオさんが日本の稲作技術を応用し、地域でのリーダーとして活躍できるように今後とも応援していきたい。

最後に、退職後に再度PNGスタディツアーに参加し、そのまま1年間ワニさんの村に滞在したいと思っている。それまで足腰が衰えないように健康に留意して頑張りたい。村ではライフワークにしている蝶の飼育、観察に取り組む事はもとより農業技術者として水稲や野菜の栽培にもチャレンジできることを楽しみにしている。

シコンさんとの再会

影山真喜さん

私の所属している「はらっば保育所」は、パプア・ニューギニアからリンダさん(00年度)、シコンさん(01年度)を研修生として受け入れた。今回、日本での研修成果を見ることと、パプア・ニューギニアを知る目的でツアーに参加した。

フィンチャーフェンに船で3時間かけて行き、ここで2つグループ(海の村と山の村)に分かれた。私はシコンさん(01年度)のいる山のチームへ(これが運命の分かれ道)。港からは、トラックの荷台に乗ってサトルバグに4時間。この間、3回ぬかるみにはまり乗客の男手で(全員で35人くらい)ロープを引っ張り脱出。宿泊先サトルバグでの夕食はご飯、野菜のココナッツ煮、スープ。



次の日の朝シコンさんが兄弟を連れて迎えに来てくれた。2年ぶりの再会に少し照れていたが、日本に居た時よりスリムになり、にこやかな笑顔は変わらない。協力隊の藤本君とシコンさんの村へ。最初の1時間は、平地なのでぬかるんでいたものの、歩きやすかったが、山道に入ったとたん粘土と石灰質の土でヌルヌル、ツルツルと足首までつかり、滑り、こける。川も2度渡り村に2時間半かかりたどり着いた。



昼食はバナナ、サツマイモ、紅茶。かなりきつい道中だったが、山に囲まれ心地よい谷間の風に、ここまで来て

良かったと改めて思った。シコンさんのファミリーに会えた感激も。

夜に藤本君の話聞くために村民が集合し、2時間半白熱した話しが。海外援助は踏み込めば踏み込むほど問題が出て、やる気熱意のある人ほど厳しい現実に出会うようで、これはどちらの立場でも同じだと思う。

外から持ち込むことの 限界

青年海外協力隊 藤本裕也さん

シコンさんが作った農民グループのメンバーの畑を見せてもらった。この畑までは徒歩で1時間かかった。

昨年9月の着任以来、私が農家に対して言っている事は「我々ができるのはテクニカルアドバイスだけだ」「お金、物に関する協力はしない」この2点である。併せて、自分たちで工夫し改善していく事を呼びかけてきた。今回、訪れたシコンさんの村の農家はシコンさんや村の先駆者を中心に既に自ら工夫し、実践していた。彼女らの積極的で自主的な姿勢には驚かされた。

その夜、私が畑を見て感じた事を聞きたいという事で20人ほどの農家が集まった。一通り話し終わった時、一人の農家からこんな話があった。「我々は、ネギやピーマンなど数種類の種しか持っていない。もっと沢山の種類の種が欲しいし、栽培した野菜から種を採りたい」というものであった。「種の種類を増やしたい」という要求は要するに「種をくれ」ということである。この話に関しては、自ら調達するための工夫の余地がある事をいくつかの例を挙げて説明した。もう一つ、「栽培した野菜から種を採る」という話だがこれは我々がもう一度見直さなければならぬ問題でもある。日本でも昔は、農家が自家採種していた。しかし、種苗会社がF1種子を開発し農家に普及した事で、農家は高品質で収穫時期の揃うという利点を得た代わりに、毎年新しい種を種苗会社から買わなければならなくなった。F1品種から採種しても、そこからは良い野菜は収穫できない。PNGではもともとそれほど多くの野菜があったわけではないと思われる。新しい品種を作ろうとすれば、ニュージーランドや日本のF1種子を買うしかない。日本のように種子生産、苗生産、収穫と分業化が進みそれぞれが完成度

の高い物を供給する事も農業の一つの姿であるが果たして今、PNGでそれが必要なのかと考えると疑問である。

彼らの技術に対する要求は強く、機械やプラスチック資材を使うとすれば、それは全て買わなければならない。しかし、PNGの村にはそれに代わる資材が豊富にある。そこに目を向ける事こそ彼らの自助努力を促進する事になると思う。今回、このスタディツアーに参加して改めて、お金や物の一方通行の援助でなく、現地の現状と将来を見すえた親身の協力が必要であると思った。残り一年、この事をしっかり考えながら取り組みたい。

人の意識を変える 協力の形

青年海外協力隊 片渕将太さん

ワニさん(97年度)に道中ずっと話を聞いたことはこれからの自分の活動にプラスになると感じた。ずっと現地語で話していたのでかなり本音を聞いたのではないと思う。ワニさんは村で自慢するために日本に行ったわけではなく、村をより良くしようと思って参加したと語った。日本に行くからには村人の期待、責任が大きくなる、帰国後は自分が得た知識を自信を持って教え、村人と共有し、みんなを引っ張っていかなければならない。印象に残ったのは、自分は行く前も、帰ってきてからもみんなと同じ一人の農民だと、日本に行ったからといって自分は変わるわけではないと言ったことであった。

PHDの研修生と会って話して、その何人かは確実に自分達でやろうとして、グループを作って、自分だけではなく地域を活性化しようとしている者がいるのはとてもいい傾向だと思う。自分の活動する地域でも最近、何人かそういう農民がでてきた。全部が変わる必要はないし、それは無理である。やはり、援助は環境を変えるのではなく、人の意識を変える方向にしていけないと持続するのは難しいと思われる。PHDでは、研修に来た全ての人の方が良くなるとは限らないと思うが、何人かでも変わればそれで十分効果はあるのではないか。今回、ツアーに参加して自分の活動の参考にもなったし、また、新たな援助の仕方もあるということを知ることができ、非常に有意義だった。

PHD NEWS

◆会費・ご寄附寄託状況

2003年 8月 122件 1,473,523円
 9月 96件 1,244,260円
 218件 2,717,783円

以上の通り、多くの皆様よりご浄財を頂戴しました。心よりお礼申し上げます。依然、厳しい財政状況が続いております。また、年末募金を迎える中、皆様からのより一層のご支援をお願いいたします。

◆堀江さん、自動車総連組員の皆さん、ありがとうございます

長らくご支援をいただいていた加古川市にお住まいの堀江貞子さんから、10月初め多額のご協力をいただきました。先日はケンターウェさんもお目にかかり励まし言葉をいただきました。お気持ちに沿うよう大切に預らせていただきます。

また、11月には自動車総連より、福祉カンパ特別寄贈をいただきました。組員お一人お一人からのお気持ち、こちらも大切に用いさせていただきます。

◆PHD協会は、今年も「NGO相談員」です。ご活用を。

PHD協会では、今年度も国際協力について知りたい、海外でボランティアをしたいなどの、NGOや国際協力について皆さんからのご質問やご相談をお受けする、外務省NGO相談員の委嘱を受けています。

電話やFAX、E-mailでも受け付けています。また、事務所へお越しいただくことでより具体的なお話ができることと思います。どうぞ気軽にご連絡下さい。

◆西日本研修旅行でお目にかかりましょう

毎年1月の中旬から2週間、西日本研修旅行に出かけ、社会学習や交流会などを各地で行います。第21期生の研修旅行の予定コースは次の通りです。

神戸-宮崎-鹿児島-熊本-大分-福岡-山口-広島-島根-岡山

当会のことをお支え下さっている方を始め、新しい方との出会いを楽しみにしています。

○月×日のPHD協会

職員 藤野 出張の途中で20年使ってきた帆布製のカバンのベルトの付け根が切れる。道中は何とかしのぎ、帰って修理に3千円。まだまだいける。

職員 寺田 服の収納はお婆ちゃんから引き継いだ桐のタンス。大正時代にお嫁入りの時からの年代モノ。取っ手がとれたり、やややつれ気味。

職員 佐々木 これがないと熟睡できない、長年連れ添うタオルケット。夏も冬ものオールシーズン。さすがに35年はもたず、今のは3代目。

国内研修生 坂西 8年モノのTシャツ。首まわりのヨレ具合が気に入ってたのに、ある日、無断で犬小屋のマットに。そしてその後は雑巾に。

職員 納堂 小学生の時に友人から買ったパチ物のアーミーナイフ。ビルマで村のお父さんに刃を研いでもらったらボロボロに。涙ボロボロ。

職員 古本 引越しが多かったためモノは極力少なく、持たない、買わない、身軽を心掛ける。それでも思い出のつまった写真だけは別。

職員 芳田 服購入時の条件は長く着られること。流行無関係。高校の頃からほぼ変わらぬ体形がそれを支えてきたが、最近ウェストが…。

以上、朝からすっきりさわやかな顔をしている順

年賀状はもう書かれましたでしょうか？

書き損じ年賀状はPHDへ

書き損じた年賀状がありましたら、ぜひPHD協会までお送り下さい。郵便局で新しいハガキや切手に交換し、日々の領収書や物品などの郵送、行事の案内等に活用させていただきます。昨年度は年間40万円相当の書き損じハガキ/年賀状を皆様からいただきました。皆様、よろしくお願い致します。

第22期研修生のホストファミリー募集

2004年4月に来日予定の研修生3名の滞在家庭を募集しています。迎える研修生は、アフリタさん（インドネシア・18才・女性）、ゾーウィンさん（ビルマ・34才・男性）。そして、もう1人フィリピンから招く予定です。詳しくは、当会事務所までご連絡下さい。

期間：2004年4月から1年間。最初の6週間は毎日。以降、月平均7日程度。

場所：神戸三宮まで1時間程度で通える範囲。

経費：当会規程の食費、滞在費をお支払いします。

当会へのご寄附は免税の対象になります。

PHD協会は特定公益増進法人として認定を得ていますので、個人にも、法人にも、ご寄附に対する免税の特典があります。